



## またまた遅くなりまして…

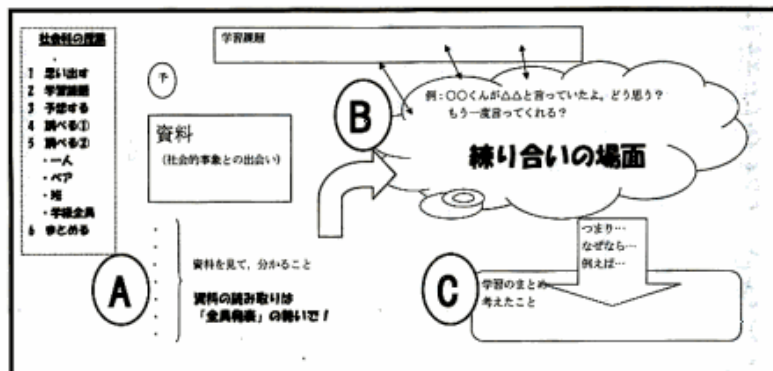
早いもので、もう、9月。今年度も折り返し地点を向かえようとしています。さらに、お忙しいことと思います。私は、現在、いろいろな事情で後手後手になってしまったいくつかの原稿に向き合っているのですが、ちょっとここで気分転換にと、これを書かせてもらっています。今回も少しだけお付き合いください。

さて、8月18日に古田台で、19日に本校で、25日に千田で、それぞれ「広島市小学校教育研究会社会科部会 夏季研修会」が行われました。10月16日に開かれる「プレ大会」に向け、授業検討が行われました。そこで、今回は、古田台、千田で提案された授業づくりについて、ご報告しようと思います。

### 1 古田台小学校の取組

#### (1) 研究報告－研究主任 田中 雅美 先生

本校の取組の特徴は、子どもの「練り合い」の場面を取り入れた問題解決的な学習の展開を目指しているところです。〈資料1〉に示されたように、A資料から分かることを発表し、B Aで出された意見を練り合い、Cより妥当性の高い結論を導き出すという一連の授業過程が「型」として確立されています。



〈資料1:1時間の授業モデル(古田台小学校)〉

出すという一連の授業過程が「型」として確立されています。

「練り合い」の場面を取り入れた問題解決的な学習を目指すのならば、資料や事実から子どもが問いを見出す仕掛け、「練り合い」という子どもの思考を促す学習問題の設定、子どもが練り合うための具体的な手立てを理論・原理に基づいて検討・工夫する必要があります。これによって、子どもの主体的な思考・探究を保證することにつながるのだと思います。(本校は、ここに挑戦しているという意味で、古田台とは違うと考えています。)

#### (2) 3学年の授業－「わたしたちの暮らしと商店」 齋藤 裕美 先生

本単元は、「なぜ、スーパーマーケットには、多くの客が行くのだろうか。」という問い、地域でよく利用されている「フレスタ美鈴が丘店」の客を集める工夫を調べます。その上で、地域によって、サービスカウンターの周りに置かれている商品が違うことから問いを設定し、スーパーマーケットは、地域の客層や時期に合わせた品揃えをしていることに気付く学習でした。



古田台小学校にて

3、4年の地域学習で大切なことの一つは、「地域(性)」が見えてくることです。品揃えのちがいが、年齢層のちがいという地域性とそれを見込んだスーパーマーケットの販売戦略が見えてきます。一方、スーパーマーケットがないという古田台の地域性に着目することはできないでしょうか。例えば、スーパーマーケットがある地域とない地域の地理的条件を比較し、スーパーマーケットが立地する条件を見出していく学習が考えられるでしょう。あるいは、古田台は、飲食店やイベント会場などが立地する代表的な地域であることに着目して、ロケーションのよさという地域性とそれを生かす戦略が見えてくるでしょう。

(3) 4学年の授業－「残したいもの、伝えたいもの」 清水 綾香 先生

本単元は、「原爆ドーム」の永久保存の決定から世界遺産へという経緯から、人々の思いや願いを後世に伝えようと努力していることが分かる学習でした。この単元で大切なことは、残そうと活動されている人々の行動や努力する姿から、継承の意味を考えることです。本単元では、楳山ヒロ子さんや「広島折鶴の会」の人たちが保存に向けて、どう行動したかをストーリーで追究し、伝えようとしている「平和」への思いに共感することが必要だと思います。これを通して、小さな声や行動によって人々につながり、世論や社会を、そして、世界を動かすことができることに気付くことができると考えられます。



(4) 5学年の授業－「わたしたちの暮らしと情報」 田中 雅美 先生

本単元は、「(中国)新聞」を取り上げ、新聞ができる仕組みから、情報と私たちの生活とのかかわりを考える学習でした。終結では、「なぜ、新聞は、なくならないのか。」という先生ご自身の疑問から、「新聞は、捨てたもんじゃない。」と感じさせることをねらって、中国新聞のイベントや街づくりの企画・運営事業を取り上げられていました。しかし、新聞の力を感じさせるためには、他のメディアではなく、新聞でないといけな場面・出来事とそこで働く人々の姿や思いと出会わせる必要があると思います。中国新聞でいえば、被爆3日後に発行したエピソードが考えられます。これをストーリーとして、小原先生流に言うと、「プロジェクトX」的に学習することが考えられるでしょう。

昨年、東京大会で、「石巻日日新聞」を取り上げ、被災地で、手書きの壁新聞を6日間出し続けた新聞社の姿から、メディアとしての新聞の意味と情報の大切さを考える授業を参観し、感動したのを思い出しました。この授業の広島版を考えればよいのではないのでしょうか。(石巻日日新聞編『6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録』角川マガジズ、2001に詳しく語られています。研究図書に置いておきますので、よかったらご一読ください。)

## 2 千田小学校の取組

(1) 研究報告－研究主任 内田 友和 先生

本校では、子どもの意欲と社会参画意識の持てるより実践的な授業を目指して、子ども相互が学び合う探究的な授業づくりに取り組んでいます。特徴として、1点目は、子どもが主体的に探究し、見方・考え方を更新できる問いを構成すること、2点目は、多様な考えから互いに見方・考え方を獲得するための学び合いを展開することが挙げられま

視点	テーマ	探究的な問いの構成	学び合いの工夫
児童の意欲を喚起し 学び合う必然性が生まれる 教材		児童が問題を発見し、意欲的に追究していける教材	多様な考え方を生み、価値ある 見方・考え方を獲得することが できる教材
論理的に思考し 協同することでわかる 学習活動		これまでの学習を意識しながら、 論理的に考え、見方・考え方を更新 し続ける活動	互いの考えを組み合わせ、見 方・考え方を獲得する活動
見通しをもたせ かかわりを促す 評価		児童が自分の現在地を知り、見通 しを持つことができる評価	友達の様子や考え方に目を 向ける相互評価

〈資料2:観点別の目指す授業研究(千田小学校)〉

した。しかし、方法としての学び合い、探究の原理、具体的手立てが明確にされていないと感じました。そこが明らかにされることによって、具体的な授業化へとつながるのではないのでしょうか。

### (2) 3学年の授業－「事件からいのちを守る」

本単元では、学区の防犯ボランティア団体である「千田セーフティーパトロール隊」が取り上げられていました。そして、警察、学校、PTA、地域などの関係諸機関が計画的、組織的に連携して安全な街づくりに取り組んでおり、地域住民が「自分たちの街は自分たちで守る」という共助の考え方から動いていることに気付く学習でした。



検討の中心となったのは、「いかす」の場面です。「千田

セーフティーパトロール隊」への参加人数が年々減少している事実から、この団体を存続させる手立てを考える展開が提案されました。しかし、安全な街づくりのために自分たちにできることを考える学習を展開すれば、子どもが地域全体の取組に参画することができます。その上、「千田セーフティーパトロール隊」の営みから、地域コミュニティが安全のためにも機能しているという新しい地域社会の見方を獲得することができると考えられます。

### (3) 4学年の授業－「地域の発展に尽くした人々～ヒロシマを遺した長岡省吾」

広島平和記念資料館設立の中心となった長岡省吾を取り上げ、資料館設立にたずさわった人々の取組や広島市の動きなどを通して、広島市を原爆による焦土から平和を訴える聖地を創ろうとする人々の願いと営みをとらえる学習でした。

この単元は、大単元「うつりかわる人々の生活」において、文化財を保存する人々の営みを扱う中単元「残したいものの、伝えたいもの」か、地域を開発する先人の働きを扱う中単元「地域の発展に尽くした人々」かのどちらかに当てはめるかで、授業も内容も変わります。ここでは、文化財としての資料館の意味を踏まえつつ、人々の行動や思いから、「復興と平和都市建設」における資料館設立の意味を問う学習を展開すべきでしょう。それは、「復興」・「希望」が今、広島から発信すべきメッセージだからです。

### (4) 5学年の授業－「自然災害を防ぐ～いのちを守るために」

本単元は、国土の自然と防災の学習として、平成11年6月29日に広島市に起こった土砂災害を取り上げ、その原因を「自然」、「社会」を観点として迫っていくことを通して、被害を最小限にするために、国や県、市、地域、家庭が連携、協力し合い、様々な取組を行っていることを理解する学習でした。

検討の中心となったのは、「生かす」の展開についてでした。本単元では、「土砂災害

す。〈資料2〉のように、これらに「教材」、「学習活動」、「評価」を観点として迫っていくとのことでした。

小原先生も言われていましたが、長年の本校の取組から教材は、かなり開発されています。今回も、興味深い提案で

警戒区域」の指定の是非を、「防災」の面と人々(住民)の思惑の面から考えるというものでした。そこで、6.29や今回の8.20などの広島に起こった具体的な災害から自然災害と出会い、全国の自然災害の原因と対処について調べた上で、「土砂災害に対処するために、私たちは、どうすればいいか。」と問い、これからの広島の自然災害対策や街づくりを考えるという学習が提起されました。

東日本大震災で被災した宮城県女川町の中学生は、「津波」という自然災害に対処するために、① 公共施設は、高台に、漁業施設は、海辺につくる、② 地域の人々のつながりをつくる、③ 津波の被害の記録を残す の三つを考えたそうです。これらは、自分たちの住む街の自然条件と社会・街づくりに着目して考えた学習と言えるでしょう。



子どもは、実際の事象に基づいて、前向きな案を考えることができるのです。

(5) 6学年の授業ー「わたしたちの願いを実現する政治～新しい「スポーツ王国」を目指して」

本単元は、「マツダスタジアム」と「サッカースタジアム」の建設の経緯を調べることを通して、公共施設の建設には、人々の願いを実現しようと努力する地方公共団体や国の政治の働きが反映していることを理解する学習でした。

この単元で特徴的なのは、マツダスタジアムの建設の進め方を学習した上で、それを生かす形で、サッカースタジアムの建設プランを考え、発信する展開になっていることです。これによって、様々な立場の考えを出し合い、学習した政治の働きにのせながら、社会参画を促す実践的な学習にすることができるといえるでしょう。

気になったことは、マツダスタジアム建設の経緯の曖昧さです。「復興の原動力」という広島の人々の球場や広島東洋カープへの特別な思いが多くの人を動かし、行政や諸団体を動かしていった姿に、ストーリーで迫ることによって、政治の働きが見出せる授業展開の工夫が必要かもしれません。

### 3 この夏の研修をまとめて…

長くなったので、ズバリまとめたいと思います。それは、何がしたいのか、考えさせ伝えたいのかをはっきりと持つことです。魅力ある教材と出会い、具体的なねらいと内容を明確に持つことによって、問い ↔ 思考 ↔ 子どもの認識が一連のものになるのです。



社会科の授業づくりは、まず、教材から入ることが多く、特に、新しいものが一義的によいとされる傾向にあります。しかし、教材がおもしろいというだけでは、授業にはなりません。新しい教材は、新しい内容を教えるために開発されるのであって、これまでの教材と同じねらい、内容なら、別の教材を取り上げる必要はないのです。



本校が提案した4本の授業は、どれも、したいこと・思いがある新たな教材への挑戦と言えると思います。まさに、「主人公」になって授業研究されている先生方の姿の表れだと思います。お疲れ様でした。



## 研修会を振り返って…

お二人の先生が研修会で感じたことを寄せていただきました！

平成27年度広島大会を通して、誰が何を得るのか 福永 佳栄 先生

これは、会場校3校の夏期研修会に参加して感じた、私の問いです。私自身が考えている答えは四つあります。

- ① 日々の授業を通して、質の高い学びをした子どもたちの成長。
- ② 社会の一員としての自覚を持ち、幅広い社会を見ようとする子どもたちの成長。
- ③ 子どもたちの成長を願い、努力した先生方の成長。
- ④ 社会科の教材に対する見方や授業の組立方などの社会科に関する先生方の成長。

広島市立古田台小学校では、①や③により重きをおいて研究を進められているという印象を受けました。小規模校ということもおっしゃっておられましたが、“一丸”というスローガンを掲げ、教職員が一体となって全校児童を見ていこうという前向きな姿勢を感じ、とても気持ちがよく、清々しい印象を受けました。②や④に関する社会科に関する部分は、これからみんなで研究を重ねていかれ、よりよいものになっていくのではないかなと思います。しかし、年齢や性別や研究教科や経験年数を問わないその前向きな姿勢は、これから古田台小学校で研究される先生方、そして何よりも子どもたちの大きな糧になるだろうと感じました。

我が自島小学校では、吉田先生を中心に社会科の研究を進めていく中で、

- ② 考えられた「問い」から学ぶ、学び合いの授業で育つ子ども。
- ④ 社会科の教材に対する見方の向上。

を実感できるようになりました。①、③に関しては、いつも吉田先生がおっしゃられているように、社会科だけに力を入れたのでは、達成することができません。やはり、日々の授業や子どもへのかかわりを大切に、誰にでも真似できそうな授業…。でも、なんでもんなに子どもが育ってるんだろう。真似できそうでできない“子どもの育ち”を感じてもらえるような授業がしたいなと改めて思いました。そのために、日々頑張ろうと思います。

### 中川 祥子 先生

千田小の新谷先生から、「千田小では生活科の分科会もするから、よかったらどうぞ。」と誘っていただき、低学年担任5人で参加させていただきました。

千田小では、前回の大会での実践を踏まえた上で、新しい教材の開発に取り組んでおられました。1年生は、「はじめまして せんだのまち」で「学校の周りを探検することを通して、通学路の様子や自然、さまざまな人々に親しみや愛着をもつとともに、その安全を守っている人々の思いについて気付き、安全な登下校ができるようにする。」、2年生は、「とびだせ！千田たんけんたい～わたしたちの町の県立図書館～」で「自分たちが住んでいる町の公共施設を探検することを通して、公共施設の役割や、それを支えている人々に気付き、それを正しく利用し、様々な人たちと交流することができるようにする。」が目標で、それぞれの指導案の説明後、協議を行いました。

このたび、指導助言者として、比治山大学子ども発達教育学科の上之園公子教授からもお話を伺うことができ、たくさんのことを学ばせていただきました。

- ① 生活科は社会でも理科でもなく、別教科である。

- ② 子どもたちが「？」を持ち、願いに向けてがんばれるかどうかが大事。
- ③ めあてが、本当に子どもたちの願いや思いになっているか？
- ④ 言葉掛けによって、子どもたちが気付いていることを自覚させるのが指導者の役割。

上之園先生のアドバイスは、千田小だけでなく、私たちにも強く響きました。早速夏休み明けからの実践に生かしていきたいと思えます。